

満場の拍手に舞台で深々と頭を下げる林家染太(松山市出身)。それまでの語り口とは打って変わり、こみ上げる思いにたどたどしさがにじむ。林家染丸師匠に入門し10年目。大阪市北区の落語定席「天満天神繁昌亭」で、初の独演会「染ちゃんの俺(おれ)色にソメタノ」を開いた。客席には落語界に入ることに猛反対だった父と母の姿があった。

松山出身の落語家・林家染太



天神天満繁昌亭で初めての独演会を開いた林家染太
大阪市北区天神橋2丁目

初の独演会 両親に感謝

客集めや構成すべてを自らが手掛ける独演会。会を1週間後に控えた染太は「清水の舞台から飛び降りる気持ちですわ」

と語っていた。中学生で生の落語に魅了され、上方落語の本場に身を置くため、関西大に進んだ。両親には「学

校の先生になる」ところをついた。「実は毎日、寄席に通ってました」。落語研究会に入り、夢が膨らんでいたある日、異変に気づいた両親が大阪に来た。家族会議。「落語家になりたい」と切り出した。

地元に戻り、教師になると信じていた愛媛大教授の父・山本博之さん(65)は「家の敷居はまたがさん」と怒った。母・博子さん(60)は「卒業証書と教員免許を持ってきなさい」とけじめを求めた。

博之さんが振り返る。「本心を聞き、混乱し、反対した。アマとプロでは全く違ふんだと。その後、気持ちの整理を付けるのに時間がかかりました」

両親との約束を果たし、芸と人柄にほれ込んだ染丸師匠に弟子入りした。3年間の修業生

活。掃除、洗濯、運転手。「2台廃車にしたりバカラのクラスを割ったり。迷惑ばかりかけたけど、貴重な時間でした」
その後の生活は苦しく飯が食えないときもあった。「両親が送金してくれた。あのサポートがなかったら、今の自分はないと思う」
「英語落語」の芸を身に付け、ニューヨークやロンドンなどで公演した。三味線の腕も磨いた。松山北高の先輩の厚意で設けた月1回の「常磐寄席」を53回重ねてきた。全力を独演会に注いだ。

幕が上がる。軽妙な語り口で観客を引き込む。大柄な体を存分に生かしたしぐさ、おにぎりをほおばる芸は観客をつならせる。三味線も披露した。最後は「師匠が大事にしている」という落語「軽業講釈」で締めた。

「落語家になりたてで松山から出てきて、独演会をできるようにしました。皆さんのおかげです」。涙交じりの染太に「頑張れよ」の声援が波打つ。

反対はしたが、「一番のファン」(染太)となった両親。博之さんは「やっとなのになった」と胸をなで下ろし、博子さんも「お客さんに育ててもらっている。いい独演会になった」と語った。

林家染太、34歳。「芸の世界は死ぬまで勉強。夢は英語落語で世界ツアー」



独演会終了後、「今では一番のファン」という両親と笑顔を見せる林家染太(中央) 大阪市北区天神橋2丁目の天満天神繁昌亭前

弟子入り猛反対「今では一番のファン」